

InterBEE 2017 速報

一般社団法人電子情報技術産業協会 (JEITA :会長 長榮周作/パナソニック株式会社 取締役会長)の主催にて、11月15日(水)から17日(金)までの3日間、幕張メッセ(千葉市美浜区)にて、音と映像と通信のプロフェッショナル展として「第53回国際放送機器展」InterBEE 2017を開催した。

本年は、過去最多となる出展者数1,139社・団体(前年対比4.5%増/2016年1,090社・団体)、そのうち、海外出展者数33カ国・地域から643社・団体(前年対比8.4%増/2016年34カ国・地域から593社・団体)、出展小間数1,983小間(前年対比3.0%増/2016年1,926小間)の開催規模となった。

今開催では、展示ホールを前回より拡張し、はじめて幕張メッセ国際展示場1ホールから8ホールまでの全館54,000㎡を使用し、「プロオーディオ部門」、「映像表現/プロライティング部門」、「映像制作/放送関連機材部門」、「ICT/クロスメディア部門」4部門にて、イベントホールと国際会議場をあわせて過去最大規模で開催した。

来場者は会期3日間で、昨年を若干上回る38,083名であった。

■4K・8K 超高精細映像の最新技術が集結

2018年12月の4K・8K実用放送開始に向け、放送事業者がそれぞれの準備状況な

どを報告するほか、4K・8K撮影・編集技術をはじめとして、HDR(ハイダイナミックレンジ)やHFR(ハイフレームレート)など、最先端の映像・音響制作、圧縮・伝送、表示技術が一堂に会した。

特に今回は、8K技術を提案する出展企業の顔ぶれが増えたことにより、海外の映像系展示会でも類を見ない多くの8K技術がInterBEEに集まり、披露された。

■IP伝送、クラウド、ネット配信、5Gの動向にも注目

放送の業務効率化やネット配信などに向けたクラウド活用やIP(インターネットプロトコル)化の市場獲得を目指し、InterBEEにはIT系企業の出展が増加しており、今回はコンテンツ配信網CDN(コンテンツ・デリバリー・ネットワーク)を提案する企業が初出展。

また、IPライブ伝送のテーマを集約したIP Showcaseを実施するほか、基調講演では5G(第5世代移动通信システム)セッションを開催するなど、従来までのInterBEEでは見られなかった新たな動きが展開された。

■AI活用、VR・AR、新しいコンテンツ体験

今回のコンファレンスプログラムの中で新たなキーワードとして注目されたのがAI(人工知能)であるが、番組制作の効率化や新たなサービス化、災害報道での活用やクリエイティブとの融合など、様々な視点からAI

の活用や連携を探るセッションが並ぶ。

また、昨年からひきつづき、360度映像、VR(仮想現実)やAR(拡張現実)による新たなコンテンツ体験の提案がさらに進展し、スポーツ中継や音楽ライブとの連携、エンターテインメント分野での活用提案が多数揃った。

■InterBEEならではの高品質な音響体験 [INTER BEE EXPERIENCE]

InterBEEの恒例企画となった、ライブイベントなどで使用するスピーカーの体験デモを本年も実施。幕張メッセイベントホールの大型アリーナに、過去最大の15製品が一堂に会し、大音響のクオリティを再現した。

また、昨年好評だったプロユースのマイクロフォンとヘッドフォンの体験コーナーも実施。聞き比べる機会が少ない高品質製品が並び貴重な機会となった。

「SRスピーカー体験デモ会場」では国内最大級の規模にて音響各社の参加によるSRスピーカーの体験デモンストレーションを実施。数多くのプロフェッショナルユーザーが来場する本展ならでの視聴体験デモは、毎年多くのユーザーや業界関係者の関心を呼んでいる。

一方ホール2では「ヘッドフォン/マイクロフォン試聴体験展示」を行い、各社ブースでは高品質の音創りと音響体験に欠かせないヘッドフォン/マイクロフォンが試聴



幕張メッセ中央入口付近にて行われたオープニングセレモニーには、海外からも多数の業界関係者が訪れ盛大に催され、InterBEE2017開催への期待感が高まった初日となった。



NHKは2ホールに広大なスペースを設け、「8K中継車」を展示。また、8Kスーパーハイビジョンのコンテンツ制作を支援する「カメラフォーカスアシスト技術」や、「2倍速スローモーションシステム」もあわせて展示した。

可能な状態にて紹介された。スタジオやライブの音響関係者や映像制作関係者をはじめ、多様なInterBEE 来場者から要望の多かったヘッドフォンとマイクロフォンの視聴体験。今年も定番製品からハイエンド製品まで、各社のヘッドフォン/マイクロフォン製品を一堂に集めた視聴体験展示の場を展開。それぞれの技術や個性が主張でき、音づくりと音響体験の可能性を提案する場をプロユーズに提供した。

■InterBEE IGNITION での講演

「最新映像技術が集結、新たなメディアの可能性を探る」をテーマに、仮想現実/バーチャルリアリティ (VR)、拡張現実 (AR)、インタラクティブシステム、360 度映像、3D 映像、ホログラム映像、パノラマ映像、没入型映像、超臨場感映像、プロジェクションマッピング、ドローン、インターネットオブシングス (IoT)、ロボティクス、人工知能 (AI)、モーションセンサシステム、メディアアート、その他映像表現技術を紹介。またハードウェア面においては、大型LEDディスプレイ、屋外ディスプレイ、4K/8K プロジェクタ、パブリックビューイング、デジタルサイネージディスプレイ、ライブビューイ

ングシステム、ライブ中継システム、リアルタイムライブ演出、ライブ演出映像システム、ライブ演出照明システム、ライブ演出用特機、空間演出、その他ライブエンターテインメントなどの紹介を行った。

急速に進化し変化する、メディアとエンターテインメントの表現世界。今年は「Show Biz」「Music」「Sports」にフォーカスを当て、クリエイターとコンテンツ、テクノロジーがコラボレーションして生み出す新たな映像表現の様々な挑戦を展開。多様なコンテンツが投入され始めたVR (仮想現実)や360° 映像をはじめ、AR (拡張現実)、ホログラム映像、ライブビューイング、ロボティクス、映像表現技術へのAIの導入など、最新の情報と日々進展する市場動向をアップデートに捉え、その可能性と未来を発信した。

■InterBEE CONNECTED

放送と通信の融合を展示とプレゼンテーションで提案。ICTとメディア環境が日々広がり変化するなかで、テレビ放送をはじめとしたメディアコミュニケーションは、こ

れまでにない変革のときを迎えている。放送はどう変わり、ICTはメディアコミュニケーションにどんな可能性を広げるのか。放送とコミュニケーションの最前線から、新しいビジネスモデルを探り発信する。

そのほか、最先端の制作ツールや第一線で活躍するクリエイターが集結した「INTERBEE CREATIVE」や、コンファレンス、スポンサーセッション、IP SHOW CASE、第54回 民放技術報告会、出展者イベント、グルメスポットなど、多岐に亘る催しを開催3日間に凝縮して行った。

InterBEE では、国内外の出展企業の最新製品の展示・プレゼンテーションと、様々なテーマのコンファレンスセッションや体験イベントを通じ、近未来のメディアコミュニケーションとエンターテインメントの世界を体感。放送・通信事業者、映像・音響制作関係者はもとより、広く一般企業や地方自治体の広告・マーケティング担当者や、デザイン・Web制作会社、施設・イベント関連事業者など、多岐にわたる来場者が訪れた。

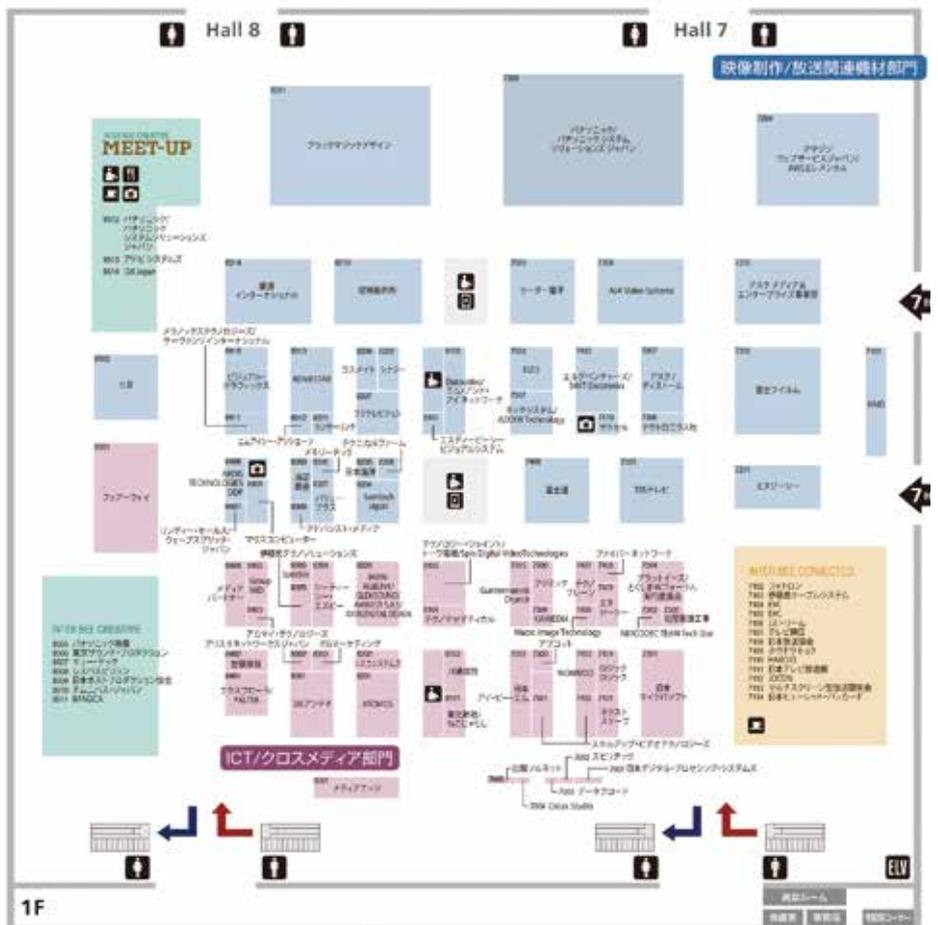
(主催者発表プレスリリースより抜粋)



複数ブランドのヘッドフォン/マイクロフォンを一堂に介して行われた試聴体験展示



NHK では6ホールにて、特別なめがねが不要なインテグラル立体技術による「飛び出す絵本」を紹介



*****開催期間中に行われた各講演内容*****

■INTER BEE FORUM

◇基調講演 4K・8K 実用放送に向けて◇

- 放送政策の最新動向
- ようこそ スーパーハイビジョンの世界へ
- キー局系BS5 社の取り組み
- 新たな4K8K 放送の展望
～A-PAB が周知広報計画を語る～

■INTER BEE CONNECTED 基調講演

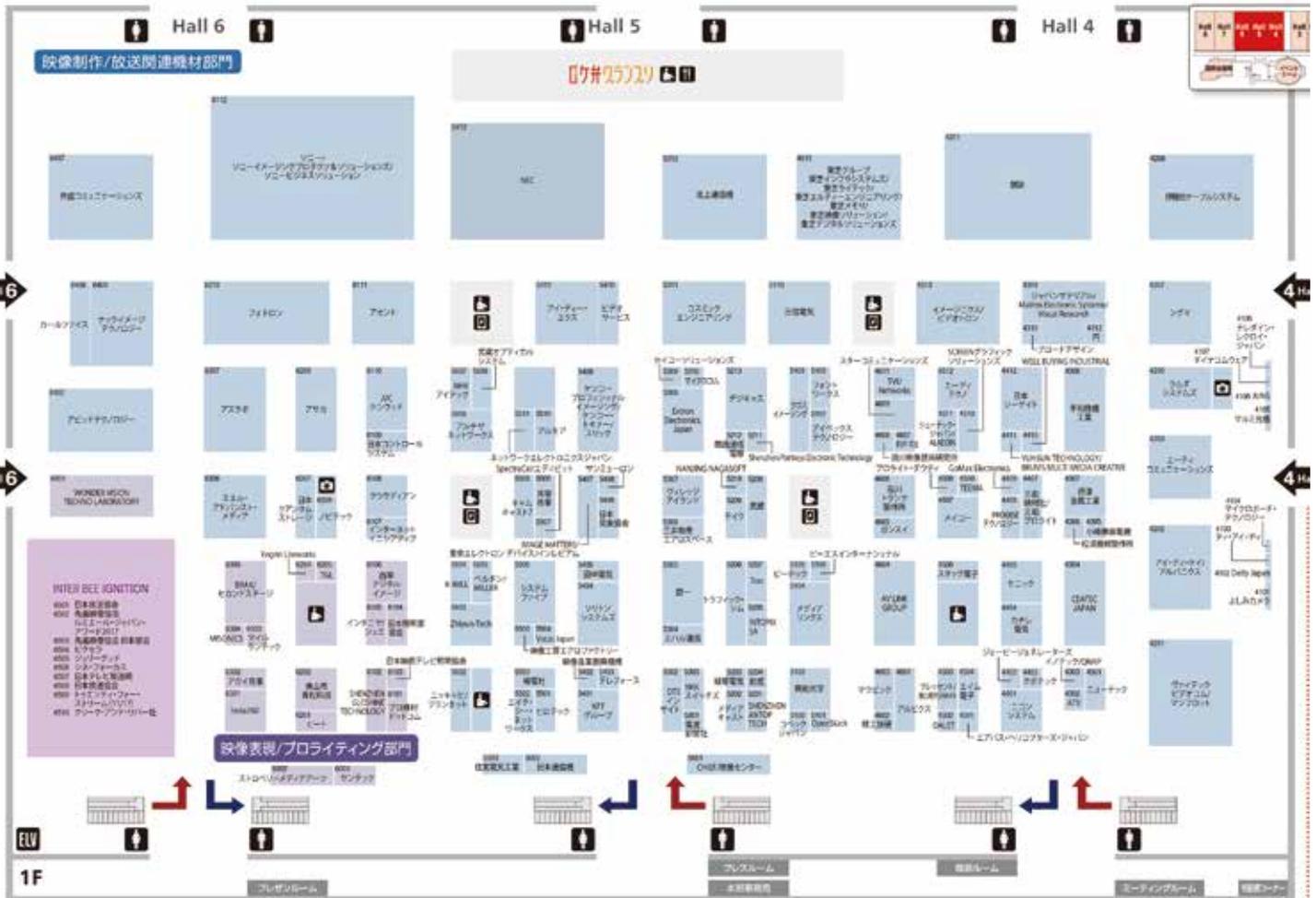
○配信新時代 ～キー局とプラットフォーム～
今年5月、TBS、テレビ東京、WOWOWなどメディア6社が共同で定額動画配信(SVOD)のサービスプラットフォーム「プレミアム・プラットフォーム・ジャパン」を立ち上げると発表。日本テレビは子会社化したHuluを完全リニューアル。テレビ朝日は急成長するAbemaTVの一翼を担う。またフジテレビはFOD(フジテレビオンデマンド)の多角化で独自路線を進む。キー局の配信プラットフォーム戦略について、その戦略と展望の講演内容。

○本格化する“スクリーン選択”の時代の見取り図を描く～電通・ビデオリサーチによる挑戦～ : スマートフォンやタブレット端末の普及を経て、われわれは常に“スクリーン”に囲まれた生活を送っている。24時間7日曜日の現代的な生活リズムのなかで、放送、動画配信、SNSなど各種メディアの視聴選択が忙しく行われている。今後、あらゆるメディアビジネスの前提として、複雑化する行動の全体状況を俯瞰し変化を捉える力が強く求められる。電通とビデオリサーチ両社によるこの難題への挑戦を、最新の取組みを通じて紹介。

○配信新時代 ～キー局とプラットフォーム～
○テレビはリビングルームで生き残れるのか?! ～スマートテレビの最新動向とビジネスの可能性～ : テレビ離れをした若者たちは、これからリビングルームにテレビを置いてくれるのか? これはテレビメーカーにとってもテレビ局にとっても大きな懸念材

料である。スマートテレビは新しい世代にも使い続けてもらうための進化をめざしている。そこでこのセッションではその最新動向をメーカーの方に伺い、そこでの新しいメディアビジネスの可能性を議論。新時代のテレビとそれを取り巻くビジネスのあり方が、果たしてイメージできるのか?

○ケーブルIDでケーブルテレビ業界が変わる : 7月から実運用を開始したケーブルIDプラットフォーム。MVNO、転居情報、クラウドファンディング、視聴ログ…予定されるモジュールは豊富。全国半数以上の世帯(約6,400万人)につながるケーブルテレビユーザーに全国共通のユニークIDを発行することで、ケーブルプラットフォームはどう変容・発展を遂げていくのか? 起案者の皆さんが思い描くサービスプランを語っていただき、総務省「ケーブルテレビWG」で副主査を務めたNRI北さんも交え、これからのケーブルライフを展望。



スチューダー・ジャパン・ブロードキャスト

時代のニーズに合わせた最良な映像と音声のソリューションを提供し、映像システム設計業務も行っている同社では、STUDER製品はもとより、放送機器システムのIP化が進むなか、同社の映像部門ではGrass Valley製品、GHIEMMETTI製品などを取り扱っており、本展では昨今取り扱いを開始したLAWO社製品を幅広く展示紹介した。

■ STUDER 製品

STUDER製品では、デジタルコンソールのフラッグシップモデルである「VISTA X」をはじめ「VISTA V / VISTA 5 M3 / VISTA 1」の VISTA 製品ラインナップとOn Airシリーズの「On Air 3000 / 2500 / 1500」などを出展した。

■ LAWO 製品

LAWO社製品のIPルーティングシステム「V_matrix」、「V_remote4」、「the wall」、「VSM」などを展示紹介した。オールインワンIPベースのリモートプロダクション「V_remote4」は、今日のIPベースのリモートブロードキャスト制作のビジョンを達成するための理想的なツール。



LAWO 「V_matrix」「V_remote4」「the wall」紹介コーナー



▲フラッグシップモデル「VISTA X」(ビスタエックス):Vistonics (ビストニクス)を核とする世界で最もわかりやすいデスク表面はそのままに、CPUベースの音声処理部InfinityCore (インフィニティコア)を新開発。その圧倒的な音声処理能力により、増え続ける

WANベースのリモートプロダクションで、ビデオ及びオーディオ信号の処理と転送などすべての要件に対応するオールインワンソリューションを提供できるように設計されており、Video-over-IPコーディングから、様々な監視及び処理ツールまでのアプリケーションが含まれている。

同製品は、今日のIPベースのリモートブロードキャスト制作のビジョンを達成するための理想的なツールで、2系統の双方向4チャンネルVideo-over-IPインターフェイス、4系統のローカルSDI入出力、およびWANまたはLAN経由でビデオおよびオーディオを放送制作に提供する際に通常必要とされるすべての処理ツールを組み合わせている。

今日のIPネットワーク技術の結果と成熟により、ビデオ、オーディオ、及びControl-over-IPは、多くのアプリケーションにとって最適なソリューションになりつつある。リモートプロダクションでは、放送制作の進化において次の重要なステップとしてますます注目されており、IPは基本的な要件になってきている。現場からスタジオへの信頼性のある、低



GlassValley社ビデオサーバー「K2 Summit3G」とライブコントローラ「K2 DynoS」を展示紹介



レイテンシーの高品質ビデオを手頃なコストで獲得することは、今後ますます必要となる。

■ Grass Valley 製品

Glass Valley社製品ではビデオサーバー「K2 Summit3G」とライブコントローラ「K2 DynoS」を紹介。「K2 DynoSリプレーシステム」、RT Softwareの「tOG Sports スポーツグラフィックス」と「K2 DynoS」のインテグレーション、Bannister Lakeの「Score Bug サッカーグラフィックス」と「GV Director」のインテグレーションなどを紹介。

■ GHIEM-METTI 製品

GHIEM-METTI社オーディオモニタリングユニット、インターカムシステムである「ASF 1×32、CFS 1×48、GMS 2180、GMS 1800、GCI S10、GCS 3×2×1」などを展示した。(写真下)



◀放送用オールインワン可搬卓「VISTA 1」: VISTA 5 とほぼ同デスクの背面に各種入出力を装填、音声処理を行うDSPもデスク内に実装することで、ラックレスを実現。22フェーダー仕様と32フェーダー仕様を選択でき、二重化電源を標準装備している。VISTAファミリー共通のアプリケーション・ソフトウェアを使用するため、操作方法は上位機種とまったく同様。96ch相当のインプットを同時処理できるポテンシャルがあり、スポーツ中継から音楽収録まで、幅広く様々な用途で使用できる。また、高品質なLexicon社の空間系エフェクター及びBSS社のグラフィックイコライザーも標準装備している。

◀OnAir 2500: OnAir2500は、ロングセラーとなった大ヒット作、OnAir1000/2000の後継機。OnAir3000をベースに簡素化を行い「オールインワン」